



## 巻頭言

# 若手研究者の能力に見合った研究環境を提供しよう



**丸岡啓二** Keiji MARUOKA

京都大学大学院薬学研究所 特任教授, 2024年度・2025年度日本化学会 会長

本年5月24日の社員総会・理事会での承認を経て、日本化学会会長に就任しました。任期の2年間、副会長、理事の方々のご協力を得て、日本化学会の一層の発展に尽力したいと思っておりますので、よろしくお祈りいたします。

さて、大谷選手の活躍が止まらない。ごく最近、ドジャースと破格の契約を結び、世界的な話題となっている。紛れもなく、アメリカン・ドリームの成功者であろう。翻って、近年、我が国は元気がなくなつたと言われて久しい。この30年間、平均賃金の横ばい状態が続き、欧米諸国はもとより周辺諸国にも後塵を拝する状況である。この差は、海外に出ると実によくわかる。また、サイエンス面においても我が国の国際レベルの低下が続いている現状を踏まえると、元気が出ないのも当然であろう。天然資源や食料に恵まれない我が国では人的資源の活用が極めて肝要で、国民一人当たりの知的レベルを高めるとともに個々の生産性を上げる努力をしないと世界で生き残ることは難しい。イノベティブな物を生み出す研究開発において、我が国の基礎、応用研究における国際競争力を磨くため、日本化学会は学界、産業界におけるイノベーションや産業変革を先導できる人材、特に次世代を担う若手人材の育成、輩出の場を提供する必要がある。手をこまねいている時間はあまりない。有効な対策の一例として、2010年から有機化学の分野で取り組んでいる「大津会議の試み」を紹介したい。

約25年前、今後の日本に必要なエリート育成を目指した「リーダー型若手研究者を育成する若手道場」の設立を提案したことがある。従来、将来有望な若手研究者の出現は自然の成り行きにまかせていたが、これからの時代は優れた若手研究者を積極的に育成していく必要に迫られたからである。しかしながら、その当時、この手の取り組みは皆無であったこともあり、その実現は10年以上も見送られてきたものの、2010年にやっと「大津会議」という若手育成の場が誕生した。金の卵というべき志願者は、全国の有機化学分野の学振特別研究員の中から毎年16名が選抜されている。すでに第1～14期生の大津会議フェローたちが約230名に達しており、そのうちの7割近くが助教、講師や准教授として学界で活躍し、今では日本の有機化学界の一大勢力になっている。今後は日本化学会を通して、このような活動をほかの科学分野や女性研究者の育成へと広げることにより、日本の産業界を活性化する起爆剤にしたいものである。

最近、野球に限らず、日本スポーツ界の躍進が目覚ましい。指導者の明確な方向性と選手の活躍できる環境を整えられれば、日本の若者は世界で十分戦えることの証左であろう。さて、それでは金の卵から社会に巣立った大津会議フェローたちは産業界の研究分野で十分、活躍できているのであろうか。大谷選手のような破格の待遇とは言わないまでも、大学や企業で彼らの研究能力に見合った待遇や研究環境を与えられるようにしたいものである。研究分野における日本の若者の国際的な活躍を期待したい。

© 2024 The Chemical Society of Japan